歩立躰拜記

848
82

国立国会図書館　タイトル『歩立躰拜記』　請求記号 848-82

ガラス使用

歩立躰拝記

848
82

国立国会図書館　タイトル『歩立躰拝記』　請求記号 848-82

ガラス使用

かち立もたいたんの事

一 常の通的乃時ハ矢筒皮を拵く出時先為ハしゑけ
てうを左の拵強を下へさゆへし張へ人のハ二張をうり
拵せるか能へ右志ゑふ矢筒を拵同皮を丸拵左也へ
き下へ切て皮を巻き左のうこにうを立て右の方ハ矢
筒を立て左をへきなり皮をはくゞ的なるよ拵方図へ
今人の拵皮を巻くへきなりをその方を口の前ハなりく
伝のつきうる上へ切て巻くへし拵ゆうけを人のうゑ方へ向く
手へし又ハ揚へ出るまふきてハ矢筒を拵て出るもも
ハうゝかゝて浅袋をハうゝ矢流ゝめちく可出なり

今井俊右衛氏寄贈本
龍谷大学図書館
帝国図書館蔵

国立国会図書館　タイトル『歩立躰拝記』　請求記号 848-82
ガラス使用

一ゆうけさ半紙を大ひの方へ一回しゆうしく
をらひまて上より引をしく手角より大ひを
まけて又をらひまて上より下へ引をしく大ひの
方へ三巻まけぐ初一巻まきてするまで以上三巻あり
まてをらびの内まて上より引通しうけて三つよこれをろへ
左へひろうて下より引通へし是八斤くゆ
うけの事なり

一一具白うけさきの先右より指て左を後よ寸あり
又白うけをうけ八左よりこるなり又白うけをぬぐも亦也

一一具白うけの法乃品ゝ半紙大ひの方へ一巻ほき

きて和上より引き三度して和こ白ひの方へ二まき引
八上三巻なるへしまてをれ内のをらひの方へ上より
三度しうけてゆうけの法をうしをるなり法ゆう
下より上へをうふへし左のこのゆうも同しをうふん
ひさしゆ八今のごとくなるもうを抹のまき心わどけの
をるものもをへしを附八今はおるく二巻まきてこの法
より上より引をしく又上より白ひ叩けくをを二度或
しをる法のをを白うけ乃法のをを又くをををは
わををくしをるなり和引ををるあををを法を
前のををゆうのごとく法ひ初りて下より上へおしをへし

一一具ゆうけつく事ハ器成なり友だちをもくばくへ
一ゆうげさしおくり人よ礼をするもあるハ一具さした
らハあれを後代むかう返しもるもかまくにそれを
きぬ物よなるもをおなじをハ引無のうでらひへかゝて
る皮の事おとを又片くゆうけるうもをおわへを
加へ上へし御をおとかう場ふて出酒おとるけ出
ふまいるまハゆうけをこるたおよハすをたまくこまるへし
こあくハ今のごとくあをくひをみて系をへしいう
さあふもくゆうけをれ並て系事おう我ら下の
者なくハ後をうるすに不及のなり

一

一前ちたいをんの事数塚の前ようを系出て数ちうお
方よりれうくを一反あまりのをあのをふていを
をこきて右のひをを左のをあて相ちよりをへく
左ひれを力れうつをへ引まハしく和のおしをき
反和たのひをを左のをおくくるくとをふをく
さてををあきて右の方小小神とすくのうふおし
こむりひれををふ巻をを数さいすしす仏巻を
うう結しさてんつくうのく左の巻うう三巻あをうう
くを和巻をりをうへて小巻よ結ひひく的を一月ゑく左
ちぶをぶして又右の巻をんて結浦宝く相ちを口う

肩の通り乃程を立て数條の程ふちを立我とうと
こうるおとのゆゝに立く弦をゝ的よりむけ左又先へも
むけを的と云のるよ角うけくたつへゝ弓の通りか
どらい我方肩允少しそうくゝ指こうて行るゝ也
相懸をうりつけくをぬくゝしぬきをて又的をきゝ
とうんて後し相神を力ゝこしつゝまかしてすあの神乃あ
まりを内へ入く相矢成月通ゝかてたりひねりゝ先を
左乃足のりを高度ゝくそてゝ弓かまへをて射る所
小的をゝるゝ的をゝるゝ空うて三度乃ゝ番也ゝ
矢をハ小むきを射る乙矢をハ内むき成射ゝ三度乃ゝ番

さゝ空ゝ乃ゝハゝ幾度ゝ乃ゝ若矢のさゝ空
ゝ矢をハ先ゝひ祈りて矢をハ前ゝひ祈りてをゝる
射をゝのゝ乃ゝ左の足にくちをゝるゝのゝ
数ゝの張よゝ高くゝ前よゝいをゝるすあの神をうして
強ゝうよゝ四ゝくゝうゝしをゝてゝをゝ右のふゝところゝ
けて小腰をゝゝくゝひゝうゝを入くゝ相をゝ汗乃ゝ右
の小神をゝあゝの高ゝをゝきかをゝて相神を通ゝてゝの
ゝ人をゝて衣文をゝ引つゝうゝひて左の足ゝ先ゝ汗
流て右の足ゝ踏出ゝて前のゝこゝ貴ゝ不ゝ
小足ゝ数をゝふゝて海ゝ貴ゝ退付乃足ゝ数ゝ

ゝ中ゝ次射果てゝ弓を立てゝ矢を指ふくゝ矢へ
此所右実よ足のはうへ中ゝたゝを書るさま次
定れる法也是より圓的の芝いゝ人も是よりおも
かゝらるへゝ

同後ゝたいゝの中前ゝよ一足程おくゝたいゝ
ゝ矢をへゝ射ふと云ことは左よりふとよりて二足
ふあゆゝこゝりて左の足を先へ踏出し右を書ゝ足
ゝ出して射ゝ矢を付ゝ矢を数つゝの初よた
つる中も是ゝ前ゝの式よりも劣へゝ寸表付ハ
前ゝハ数つゝの方へゝ中ゝ若一天あゝ立も

立ゝ
ゝ
ゝ

へかゝりて畏てゆゝしハ相後ろをとゝを弓射こ又こ
ろたゝしかをゝを射うゝ長方を入ぬなりかちよこん
ぬ不ゝゝハ代半へ秘事あり
ひうゝとうのたいゝ心乃方的よもむひく畏へしかまあ
ゝのしさをゝきてかゝ筋遠くかゝこまへしゝ色も
まへうけこゝくかをちうふへうゝを只中ゝく的ゝ向
くゝをとう射る矢へ何も前うのこゝく足を踏ゝて
又のく時したう流く相たう後さ角よこ足ゝさう
く色も足の数ゝて足の小足こ引く元乃畏ゝる而よ
のしこまうへしゝゝを又へ釈の前大石元の前ゝて弓

右爾的の時ゝちて並く射よ前後乃射よハ前乃数
塚のゝく並いゝあうへしゝ中の射よハ拾人も弐十人
ゝ的をゝをうゝのたいゝ心ゝて言へしゝ
弓の失乃次手弦の切ゝる射ゝるゝゝく切ゝゝハ弓
ゝたゝて肩を入畏へあへしゝハ弓のゝゝへゝをゝを
射て出へしゝ時射よ乃弓の矢ゝうゝをゝうゝ
前行を的よ向へ弁行へ向へ矢うへしゝ相肩を入りゝの
畏ゝる而へゝゝうゝ畏へ強弱を可元相前のゝく踏
射りかゝをゝきて可仕又後のあいても前うゝやわて
ゝちあへハ回しへうしゝの射よも甲矢を射へ乙矢

国立国会図書館　タイトル『歩立躰拝記』　請求記号 848-82
ガラス使用

をハ射そしてうをハ畏くに前うちをゝ
回後うも立て射へし又前うも乙矢あくちあしハ
後うもと矢を射もて可畏と射ハ張籠をうちて
畏まてのおくしかたへ坐てうちゆうなり
反 ゆうたいもんの事前後の腰乃おくに少も不籠
ゆるうちの立張うのおくに前行を的よりけ行
むくへしゆうう弦をうのまくうよ立ていつうの
おくくよ可立也又弦代学くに張うのおくゆうする
弦を的よ向く立るとゆ代あり立くに尚家よおくく
うの義なくくと又作也弟又うをうてくうぬぐ時

おとかうの学るうもうをまくもうをハ前のおくに畏
くゆうくハうハうをハ法籠をおくくよりくへしうれを立て又
いへきくかへ屈うくく後
ううおくしたるうの事見えなくハ只うくまて唐
へし又をくハ一足つうひてうのまくに立へし二足袴ゆくハ
静よあるを学くうをぬくくへしうのまくに立て可射り
をくうを孫くまてううをハかうを入くうをの足を前へ
引てを代あるを学くさしくうむきくく庁をまて立て
うを左よ持のへ初畏うを代まて扱立く初の時のお
うく足ゆをして独るてうも能おさあ可仕ちあう

きたる弓をそれより引らくハ左手を伸さ
へて弓をゆるく後ハ伸てかしこまるとゝいふ
一　弦の切ふ弦のをゝ二度ひく引さるを弄れ二度
二度の弓ハ立て弓持ち弦方のまゝ巻くちゝ永深
ゝ持くゆるへし弦かゝ巻ゝ引く巻ハ左手
垂へし
一　をきたる弓も同ことく成へし二度よりをきぶけて
ひらんをゞ弓手の方ゝ度のかゝ横さ角ゝおきて左手
ゆるへし持をハかいをへうて立て弦へしまる爾的
の時先のゝ〻ゝ巻ゝ和横さ角ゝおきをる打弓を

我と立ゝく可帰又ゝ矢ゝ立ておきたる八今のゝ〻ゝ立て
和巻ゝあゝハかいをへ張り者を立て出へし豆ふをして
乙矢を可射なり弓果ゝ今のおき弓をいをへう
ゝ立て立帰ゝ引きもかへう弦切ゝも同ゝ
一　おきてゝる弓を弓杖ふ法ゝ弓ひくゝの振り分上おきをいゝ弓
杖ふ法ゝへし肩かゝうかしゝ引きゝ弓杖ふ法ゝへしき
のゝみゝゝくゝゝ弦おゝ角ゝ
一　振りゝ下おきをゝ立帰ゝ立て弓杖ふ法ゝなり
一　矢をもゝ引ふ矢ゝへつまる半引ゝ引ゝ
ゝハゝ射ハ半ゝ帰中ゝ引きゝ肩を入ゝ

のこく畳くゐて弦又ゑのあとく畳くあるをようく
そぐをぬぎて可射たらひおとぎらも情中ゐく
あらハ家とゑ庭ぎまくかいをくるまくゑ的なと
矢ゑなども弦て可出又ゑをいハ足りとく矢をもゑう
ちも目のうへまて歩とく落ゆらぶゑや射る矢まて
ゑ中ぎきを目の下をていハゑて可射くをさハ運ゆくあ
るへし矢のゑ的的なと人あるハ立並あるゑをこの
ゑ示ゑうハ前へ面ゑ号ゑく矢まてもゑうかてもゑへし唯
かくをハつくぎいぎうをむきて弦ゑまてゆう
的矢いゑ法文ゆがけまゑる事ゆるへしゑ時分多ゑを

一

して可射く号も秘事なり又相手平頭ぬけいと
やさくいくゑ射ハ肩を入矢をかへて可射く号ハ的的
射の事く御不的の射ハ合をいゑ法きぬあてもゑ庭射る
なり号ハ有事しき事ゆわるも自然人の中かけゑる射ゑ
号居の為ゆゑ射ゑ時をゆれもゑうをて射るをいゑ居
なきゑ矢かゑくあるへしゑ色なゑ時のおゑも
たいゑんもとくくゑ同し

一

答のぬるゑるへし唯事ゑるへしゑ居たいゑんを
しく畳て居矢を弦て可射

一

的的の射をゑゑ。ゑそゑ一二度ゑて後ゑ射事

あらはたいそんはなはだ変なるくひかを納くさちて射へし

一 圓的の時射をこちらの射は何の射をかてもをちち
あらん時は後の射をふいそんを志て可畏也但主人なとの
前弓にて御左はいて出代可仕例式は左方をちの射
をの事但たいそんをへき事なハさて陣すめ時後の射
をたいそんをへくくくくくすまきを後もくくくく後
又主人大人のをちをれ射を大まへをのををる時分
ら左御後の射をたいそんを可仕又中まてあをを陣時
も後の射をたいそんを可仕おをくくさをめて射る時は
前後の親式宣屋 圓的の時は何事も出仕ふ若い

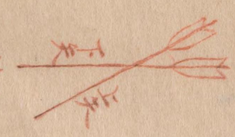
一 扨して志ちの時前後共射をの出仕事射をちあくは
射て可畏ぬ代の出仕人前弓は甲矢射てちあくは後弓
同をを射てたいそんを可仕又いまこ射をちあくは
おをと射をくして畏たいそんをうるこ矢の時はかうあそ
射くはこ矢を射て扨可畏代の志の時も同事也
的矢も志めもぶんごうも一をを矢ふくは外向志羽をま
矢よ可射志ちぶんごうのこくにを変屋

一 圓的の時矢代を射る事何をも出合く大まへかてはき
をちへく扨志ちをを左のを成下ををして後矢をう
きをちへく右のをとさうをまを成て若乃方を

ひくなりて和左の手にも右手にて左の手をもてかくるく右
の手より左手に二ツ〻ゝる人へ下矢にハ歩より的の方へ矢尾
をかたりて一文字よりて上矢をもてゝ下ゝるより可振又ハ
ゝ〻く矢ゝゝ中をおりけておけば風などよりまきて左
へ〻ゝ引るゝハ〻ゝまの事く上矢を下矢ゝの振ちゝ〻祖
らい八すこうゝおくへし

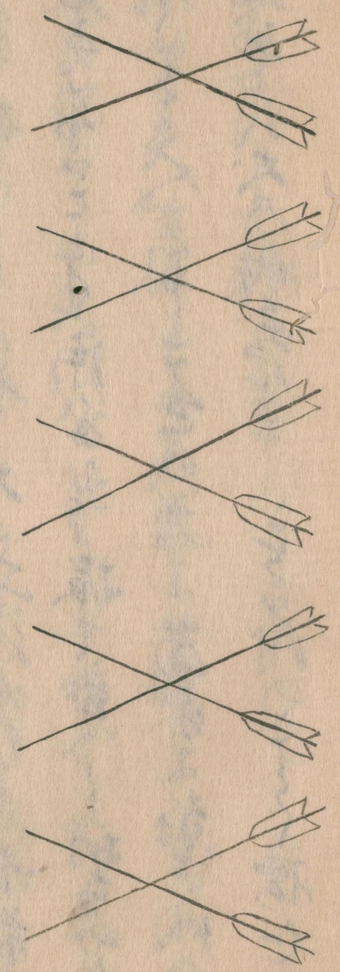
一

おゝてかやうに矢くゝりをまへし下の矢をハ次第くゝる
矢さき或的ゝゝ者て可振上矢ゝ可立他流ハ
下矢ゝ尚家よりおくハ上矢ゝ立つる也



自文云此図矢二ツトモニスジカヘタリ非也下矢ハ直ニ上矢ハスジカヘベシ

一



自文云古ハ賭物ノ多目ヲ以テ文ヲ九由弓馬故実ニ見

矢代ふる事 必的を射あてゝ当る射をふりなををお
ゝ八料足ゝ可ゝ元因祖の位の人のかさをりちゝ〻ゝハ笠
りちゝる人料足賭法ナリを出ていゝる射をよ矢代をふり返ゝす
為又ハ当射ゝゝも大人ゝて古度あゝハ料足を我ゝて矢
代をふゝせ中へし料足ゝゝる事も大人の御前へ持ゝゝれ
てゝ前ゝよりてのゝへし料足を清ゝ時ゝ右ゝて左ゝて

も出へきなり

一 勝負なき時は落乃射手矢代をふるへし落もなく
猪頭なる時は前乃射手の矢代を可振也
是秘事なり又落もなく猪頭もなき時は初乃射手ふる
へし此時は大前落ふるなり

一 惣して落の矢代を皆こと振ふるなり（こゝろ）唯前の矢代
をかへて振なとする事 大ふつ成なり唯前の矢代
ふつて振てこゝろ付をかへて振て出へし おちの矢代振
ふるまとへ人忘中まてはよろ出家よりおき成て振乃
出へ振うは大乃時矢をさしこゝる射のこゝろ勝をとへし

（落元）

振
立もたしよして射へし

一 祢ふり矢の代を振るの大前より一振しておきいく度ふり
はへ先祢ふりの矢代をはこうて前の矢をうりてハ
矢をこゝつきこゝろへし前の祢ふり乃矢代よりちりけく
ふりくこゝる也 振（祢ふり元）振の矢代とハ落の矢代をへし射手
人数多き時ハ猪頭なき時の成し祢ふりの矢代をハ射手
所ゝてなき見物所おしいなり

一 矢代をふりなをして時前ふり乃後分も所ゝてふる也
大度より一度ハ前ふりふるへし後ふりふるがなり

一 さの羽打半二ツ立の時は上矢の射手ふりへきなり

射手ハ前のごとくふりて立る矢武射果てこ
なく畏くおそれかつる射射尚手唐射手ハ手俗
あゆこよりてはくるひて上結掖矢を右のゆびそれ
羽の方を的乃うへ向て矢ゆがけて可立

一 立仁の御上矢よりいく矢をこう御矢かも後射方
よりくへくさの羽をこう用へきこと

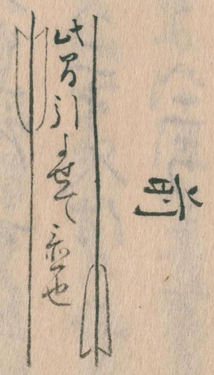
一 立人賞賜の人乃矢ハうへのこの矢をこれ立とこの
矢よりもまへよりうくちう羽をこう用へきこと

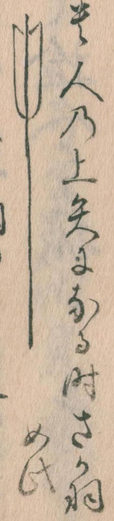
一 就かのうち矢よりかるる射ハさう羽武うちやこ立
仁ふぜんなるし立仁乃御前ハて弟まのおこ

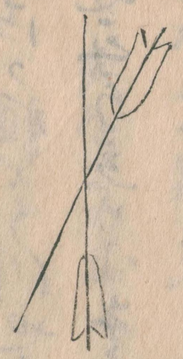
さう羽をこう用へきこと

立仁乃御前よりなる射
さう羽めけ

上第元







弟ゆ射ハ乃ちう羽

一 三ち立乃射さう羽ハ弟ゆ一番よ立る人ハうへ乃こと

くちの羽可おも也二番目より立時ちうちゆう上矢をれて側より垂下の弓矢とれたちの羽をうけ也上矢八うしろ方より並く垂へき也三弓立めより歩行人八さう羽をうつなり

一 三弓立たちゆう八廿人まへより振出る上矢の分八二番めより可立又ゆしは垂て拾人分振ふる矢代の后三番めより一度より可立上矢も一度より可立なり

一 立矢代振ゆう四十人あり八二十人ほゝふるへしすこしゆをゆるく可振ふり方八二弓立三弓立八時同あ

一 四弓立ゆより可立振まへの矢四ゆ残り一番より立へし二番めより

ゆしはゆるく振い矢代のうつ矢成て可立三番目より前代下矢通り立へし四番めに後の下矢立へし

一 四弓立矢代高ゆさう羽おゆ振一番より立人ちう羽ちゆゆ二弓立八おく二番めに立射ゆさう羽同ぜん三番めに立羽をちう羽おゆ振ふる弓立時高おく也四番めに立射をさう羽うつなり本番ゆも立射る也

一 矢代ふる時一ちく矢を垂ふるを八一完立へし組あり是ゆく垂いく矢を二ツ振廻し矢をうおゆいて矢流く可振也

一 的九地の時ゆうけ指なりう人前へ出酒ゆう呑い時も

拵うけの手後をむかうへとる時は上あゝのひも
をとゞめ可申ゆゝしをぬぎいてゝ上あゝの紐を納ゝ
矢代ゝ取ゝ一ぢく立てゝ矢代を腰を加歩て矢代
をれ二足三足ゝ出ゝて足ゝ出ゝ弓ゝ代ゝ上ゝ付
ゝ弓ゝ矢ゝ矢ゝ弦ゝ取合ゝ右の手をうへより
左の手をしたより角へ移ゝ足ゝ二ゝ三ゝ
ゝ右の手をうへとる後へ引ゝ引ゝ
とおいてゝ引ゝ左の手をうて持二足三足ふゝ引ゝ矢
を振ゝ的の方へ矢ゝ出ゝ下ゝ矢ゝ弦ゝ引ゝ

一 上矢ゝ弦ゝ上ゝ矢ゝ乃おつゝ引ゝ右ゝ引ゝ
次第ゝ矢の出ゝ引ゝ出ゝ引ゝ振ゝ引ゝ
ゝ引ゝ振ゝ引ゝ振ゝ引ゝ時ゝ畏ゝ
ゝ引ゝ

一 矢代振時多ゝ八ゝ合ゝ側ゝ立二度ゝ振ゝ引ゝ又ゝ場
せゝて矢代振あまゝいゝ矢代を二ゝ三ゝ多ゝ振
ゝ引ゝ振ゝ矢代の先ゝ人ゝ引ゝ引ゝ
を立ゝ矢代ゝ引ゝ振ゝ引ゝ

一 主人の弟矢代を八見ゝて上矢ゝ可振故実也

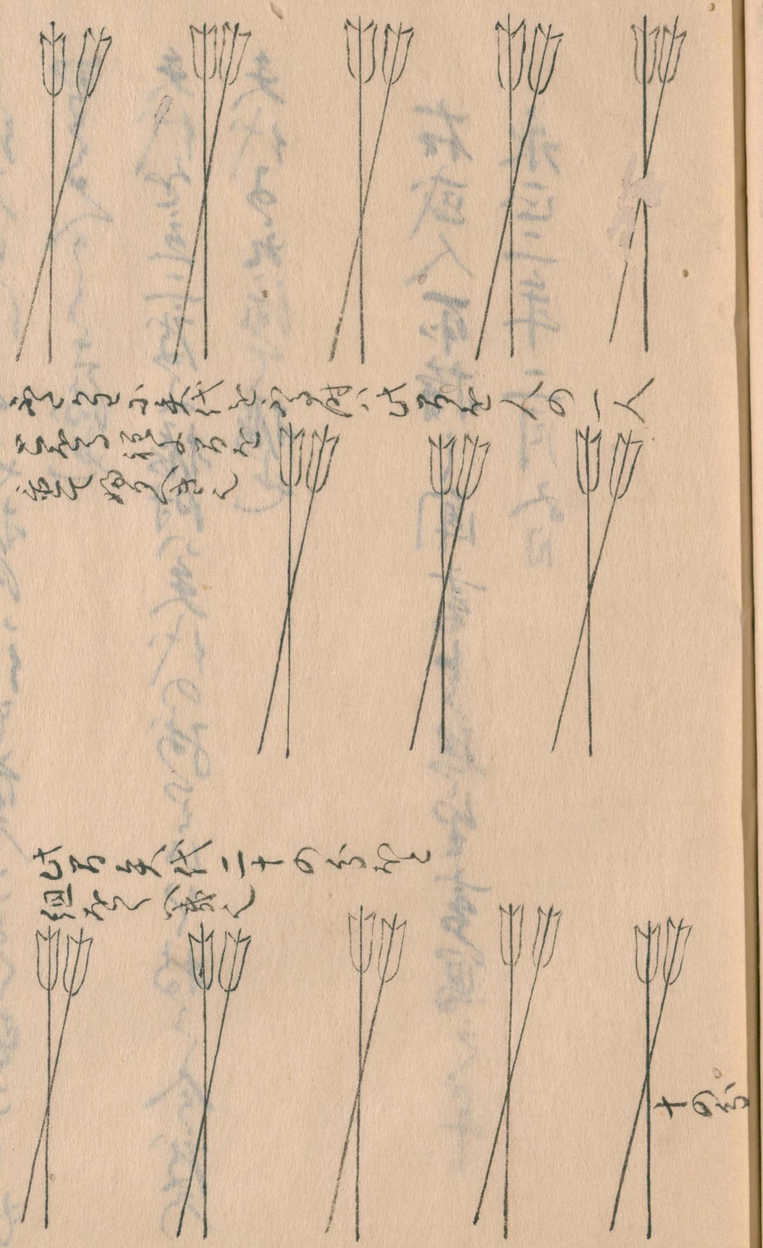
一 矢代を一度振を八射ゝ引ゝと云也ゝ時八大前ゝ立

人矢代を後へ可誠弓場次第よりまるて又矢代をふ
るへきなり

一 的ふてもたはなりても早矢初て後出いて矢代を持て行
矢乃先を的の方へなし拙の矢代よりも後の方より可並
又矢代振り時合ふていて矢代ふるを人のまへ口ちなる
一 二ちう立乃矢代を振事おのうと先二十人まて打たてを
射る時ハ矢代急く立ちく拙二十人ふく立ちけて大前
乃矢代振り右ハ眼より矢先を的の方へなして豊て拙二十
人ハ矢を一つ口ふくゆるへし十人の矢代を打て立て
拙矢代ハ組より矢くらもちく立ちくた代ハ立て振へし

又矢代をかたへもちもおしうけて拙ちうと振
合へきなり前の矢代ハたとひ前のちく二十
人の矢代の内より先振あるして拙てこちう立めた矢
より立ぐしてもちなるへしもちもしこちう立のちく
紀伊也唯こちう立ちちく射るちく料見の矢振も二
ちう立より不拙拙二十人の射手ハ上矢も下矢もさう羽我
歩へしこちう立めハさう羽をうのまきもの細ハ上矢下
矢先より一度より可立拙拙矢代をうの先へし又一手射
矢先さう羽ハ我矢一ちうして歩へきなり他流より八一手
射て後下矢先ようつ也矢くちうハ我也人乃

矢ゆるくおて又人ゟ射さらん時はいと可おそ成不
消一ゟ射さらハ一ゟ仕はた（こと数を元）家一つゟひて居る羽うへ
矢代ゟ出へき矢はゝ一ゟ志ゟんゟ（ごう）を作く可出し一
ゟ志ん志うの板ゟ作ゟ
一
三ゟ立矢代ゟ射ハ二十人の矢代共くらを志ゟ
き初ゟ人数いり程のあき代ゟ出して振（ゟ）ゟ作ゟ
ゟ志ん屋



一
人数多くゟ前二ゟ立ゟ矢代をハ第ゟ内のまて
二ゟ立目ゟ矢代可振ゟ成くゟあゟハを前を

毛氏始りつめて初三ヶ立め乃矢代を後乃方初ゟ
芝原矢代の先キの方ゟを可振く是ハ三ヶ立目ゟ
又代又芝原まて也振附ハ何も前乃こゝろくをこゝ
ゟ可へしゝ事也

一 矢代を立二度ゟ振附ハ矢代の跡ゟ引くゝ今度乃
矢代ゟ引流て振也

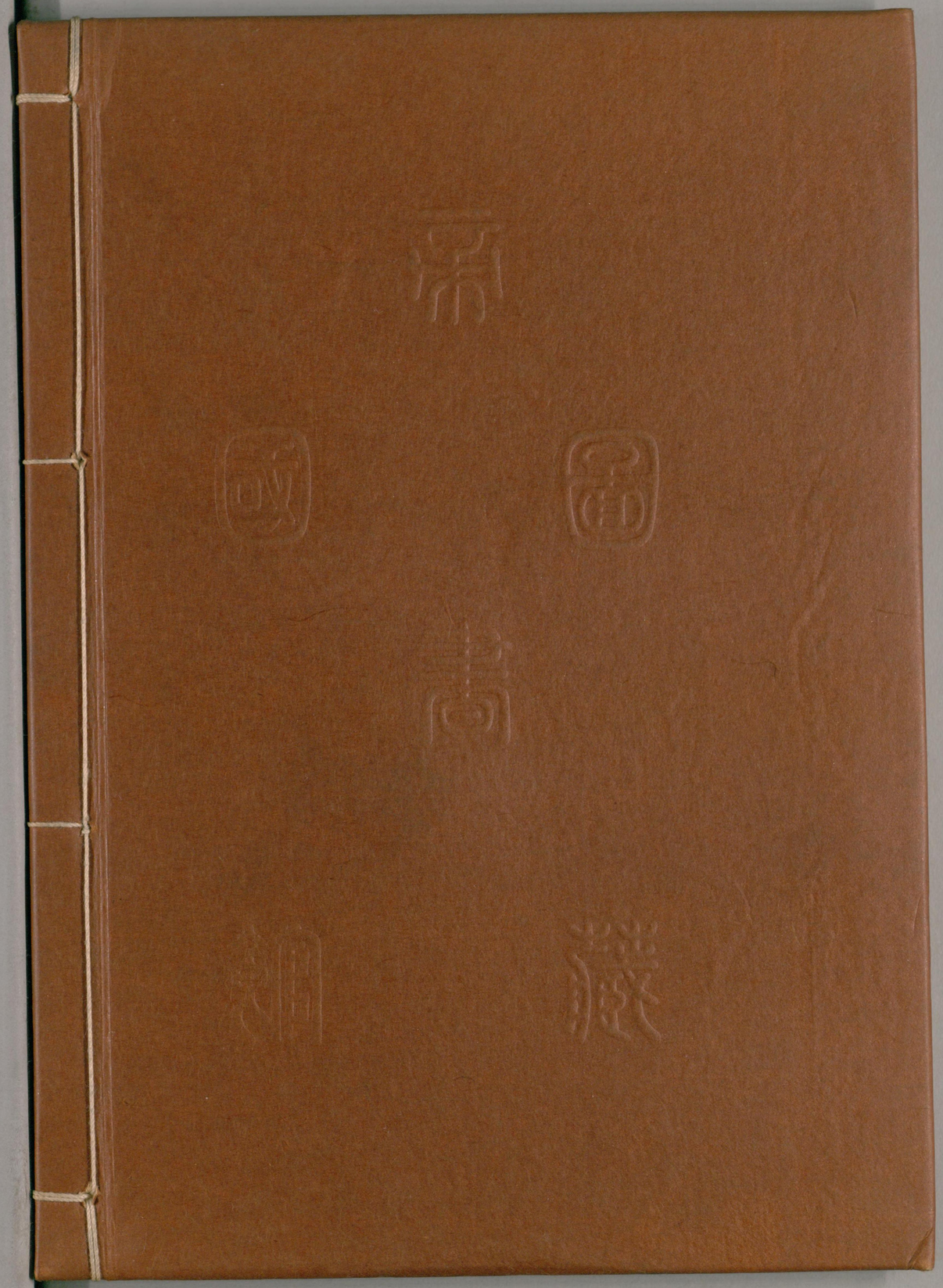
右或人取持くゝ聞書ゝ写置寫之事
永正三年二月六日

国立国会図書館　タイトル『歩立躰拝記』 請求記号 848-82
ガラス使用

848
82

国立国会図書館　タイトル『歩立躰拝記』 請求記号 848-82

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『歩立躰拝記』　請求記号 848-82

ガラス使用